

七ヶ浜町文化財調査報告書第5集

だい 木 囲 貝 塚

—昭和53年度環境整備調査報告—

宮城県宮城郡  
七ヶ浜町教育委員会

## 序

大木圓貝塚は、昭和43年3月18日、国の史跡として指定告示され、直ちに昭和43年度より用地の買収を開始し、昭和46年2月先行投資によりほど全面的に買収した。史跡面積は約20万m<sup>2</sup>ある。昭和49年度までには、国庫補助、県費補助をうけ土地買上費の支払いを完了した。

貝塚は七ヶ浜町ではいたるところにみられるが、世界的には数少ないものである。貝塚は他の遺跡にくらべ、動物の遺物がよく残っていて、大昔の人々の生活を知る上で、これほど良い遺跡はない。

大木圓貝塚は、面積が広大なだけでなく、昨年度の調査でも私たちを驚かせたように、数千年の歴史が、5～6mの厚で、何十層にもなって、広大な地域に埋蔵されているのである。

この貴重な遺跡を保存し、活用をはかるため昭和47年度より環境整備事業を開始した。本年度は、見学者のために、便所、水飲み場、ベンチ野外卓を設け、広場をその周囲に造成した。また、整備の全体計画の再検討を行った。

昨年に引き続き行われた事業は、史跡境界に沿って柵を延長し、土地侵害を防ぎ管理しやすいようにすること、植栽並びに伐開、試掘調査等である。

植物については、昨年中条幸氏により植生調査等の報告がなされた。今年度は植物全般にわたって中条氏に御指導をいただいた。

試掘調査は、昨年は余り深くなつたため作業が困難となり、一時中止し、危険防止等の準備を整え、本年度再び同地点を掘下げた。

調査の結果、深さは6mにも及び非常に良好な貝層を発見することができた。資料は多量なので未整理のものが大部分である。事業全体の進行、調査のお世話、報告書の編集に終始した八巻正文氏の努力に感謝いたします。

末筆ながら、この環境整備事業を御指導下さった東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚なる感謝を捧げます。

七ヶ浜町教育委員会 教育長 三浦 作兵衛

大木沢以塚環境整備指導委員

伊 東 信 雄	東北大学名誉教授	考 古 学
加 藤 孝	東北学院大学教授	考 古 学
興 野 義 一	医師	考 古 学
佐々木 嘉 彦	東北大学教授	建 築 学
芹 沢 長 介	東北大学教授	考 古 学
丸 田 賴 一	千葉大学助教授	造 圖 学

## 目 次

		頁
I. 調査概略.....	八巻 正文.....	1
II. 貝器.....	岩渕 康治.....	7
III. 骨角器.....	" .....	19
IV. 石 器.....	梶原 洋.....	24
V. ウミガメ.....	佐久間 豊.....	33

## I. 調査概略

### A. 大木貝塚の位置（図版I）

北緯 $38^{\circ}17'58''$ から $18'15''$ の間、東経 $141^{\circ}2'36''$ から $3'3''$ の間。地籍は宮城県名取郡七ヶ浜町大字東官浜字東大木、西大木、北下方、南下方の四つの小字にまたがる。25,000分の1地形「しおがま」

### B. 調査の目的（図版II）

今年度は2つの調査を行った。

#### 1. 試掘調査

これは昭和52年度に調査したCS77地区をさらに深くまで掘りさげ、大木2、1式期の貝層を確認するために行われた。昭和52年度の調査では大木6、5、4、3式土器が深さ2.5mにわたって層位的に出土し、その報告はすでになされている（八巻正文他 1979）。また、この調査は貝層断面の展示のために行われたものであり、貝層展示計画についても上述の報告書すでに説明した（八巻正文他 1979 p.p. 1-2）。

#### 2. 遺構確認調査

今年度の環境整備事業の1つとして、史跡の正門付近に、便所、水飲み場を設置することとなり、遺構確認調査を行った。

便所の位置については、佐々木嘉彦博士及び仙台市野原廣他の御指導をいただいた。利用しやすい場所にないと便所があっても利用せず、園内のあちこちに大小便をすることとなり不衛生である。低い場所、見えにくい場所にあった場合利用しにくい。また見学者は園内に入るとき必ず便所に入るが普通であり、正門付近がのぞましい。また公園の便所で女性が痴漢に襲わられた例もあり、管理しやすい場所でなければならぬ。BA80付近は以上の条件に合う地域であり、分布調査でも埋蔵貝層がなく（福田友之 1973）、地表にも貝殻や土器は散布していないことは調査すみであった（八巻正文 1974）が、今年度の整備事業に先立ち、検土杖によるボーリング調査、次に表土をはぎ遺構の有無を確認することとした。

水飲み場のまわりには、ベンチ・野外卓を設置することとなり、BG73地区を中心に遺構確認調査を行った。

ベンチ、野外卓はCA60付近にもおくこととなり、確認調査を行った。

### C. 調査関係者

調査責任者 伊東信雄

調査員 八巻正文

参加学生 東北大学大学院一小林和彦、梶原 洋、平野信一、松本秀明、宮城豊彦。東北大  
学一菅沼 健、小川 出、奥村吉信、斎藤曜一、田村吉久、丸 力也、須田良平。東北福祉大  
学一船山政志。宮城学院女子大学一宮沢真弓、加賀やす子、中鉢恵子、遠藤裕子、川村えり子、  
岡部博美、小森教子、篠木多恵子。宮城学院女子短期大学一庄子弘子、上野一恵、占田真美。

宮城ドレスメーカー専門学校一宮沢浩美。東北学院大学一佐藤社一、阿蘇幸二、坂 忠彦。  
作業員 佐藤鋼治、高橋 鉄、阿部はるえ、佐藤千秋、佐藤とみ子、佐藤みちの、佐藤ミノ  
ル、鈴木うん、鈴木けいの、鈴木とめ、我妻エイ子。

協力 東北大学理学部地理学教室一西村嘉助、小元久仁夫、中田 高、岩渕康治、佐久間  
豊。

#### D. 地区設定（図版II）

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の背に縦軸を設け、この縦  
軸を3m単位でくぎり、南から北へアルファベットA～Tの記号を付ける。これだけでは60m  
にしかならない。そこでさらにその上の単位として60mごとにA、B、C…の記号を付ける。  
縦軸に直交する横軸も3m単位で区切り、記号として数字を東から西に1～99を3mごとに付  
ける。しかしこれだけでは史跡全域をおこうことができない。そこで東部地域には最初にEを  
冠し、西部地域にはWを冠することとする。例えば西部地域の地点、区はWA00のように表わ  
す。基準の石標はCA70地点及びFA70地点の2ヶ所に設けてある。

#### E. 調査方法及び結果（図版III）

##### 1. 試掘調査（CS77区）

発掘は主として小林和彦が当たった。2×1mの発掘区を8等分し、それらの小区に①～⑧の  
番号をつけ、土はすべて採取した。昨年大木6、5、4、3式土器が順次層位的に出土したが  
今年度は予想通り、大木2、1式土器がさらに下層より出土し、貝殻も極めて良好であった。  
深さは昨年掘った深さからさらに2m掘り下げたので地表からの深さは6mにも及んだ。

昭和52年・53年の2年間にわたる発掘の結果2×1mの小さな発掘区ではあるが、大木1～  
6式土器が約5.5mにわたって層位的に出土した。まさに展示にあたいする地点の発見である。

採取した土は1間×1間の小屋に入り切らなかった。この土は4段階の築をつかい水こしし、  
遺物を収集している。築が1組しかなく、この作業は未だ終らない。

##### 2. 遺構確認調査

発掘区は、AT74、75、76、77、78、BA74、75、76、77、78、BB74、75、76、77、78、BD  
73、74、BE73、74、BF73、74、75、BG73、74、BI73、76、BS58、61、BT61区である。

いずれの区にも遺構は認められなかった。地山も浅く、遺物も数点にすぎない。

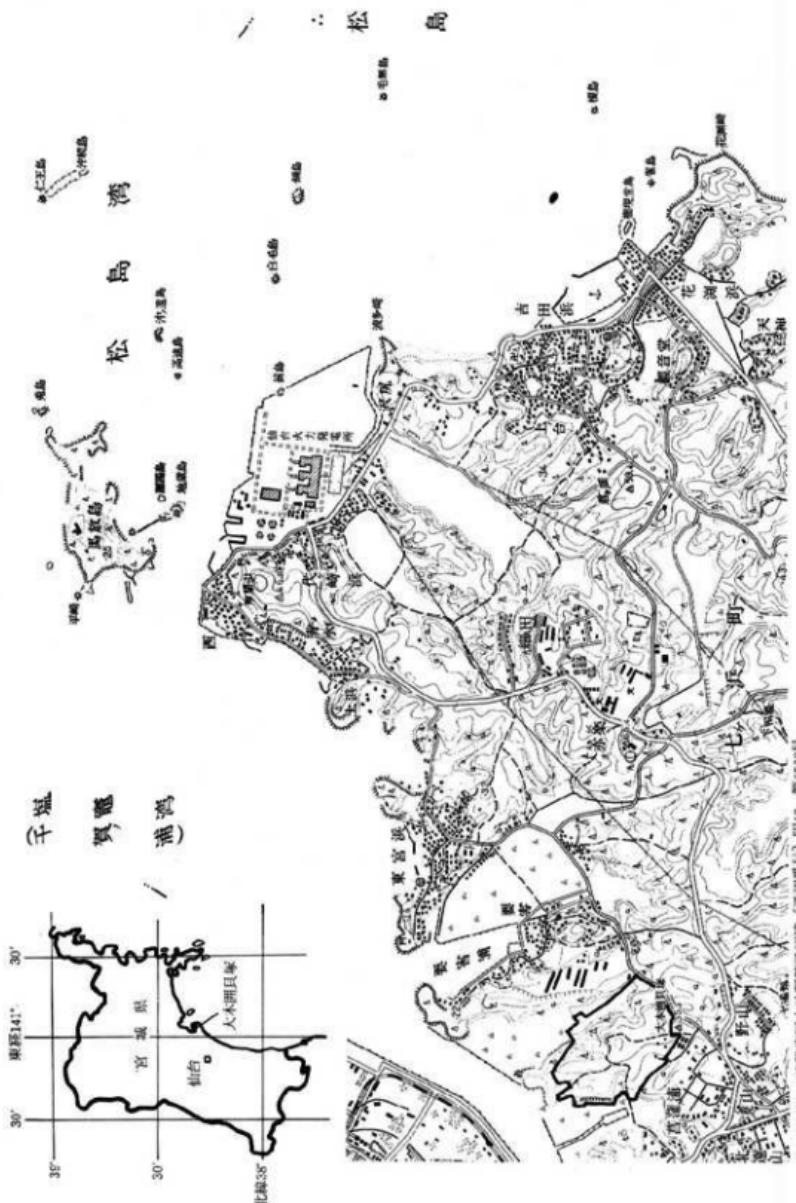
(八巻正文)

## 引 文 献

福山友之 1973 (昭和48年) 史跡大木原貝塚環境整備調査報告書 I 七ヶ浜町文化財調査報告書第1集 宮城県七ヶ浜町教育委員会

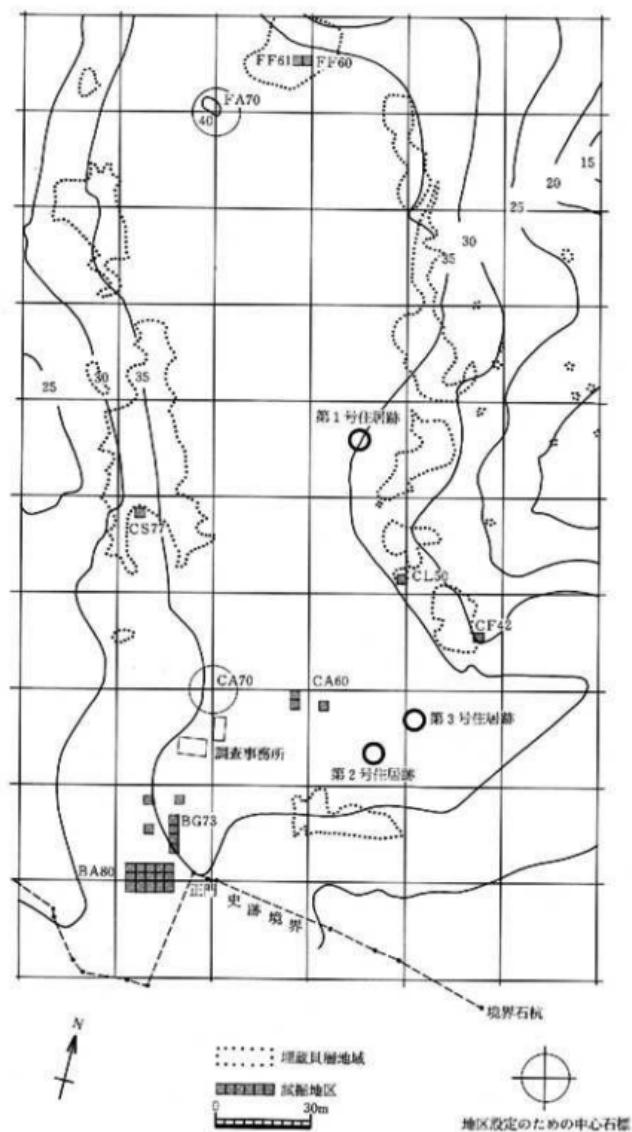
八巻正文 千葉英一 1974 (昭和49年) 史跡大木原貝塚環境整備調査報告書II 七ヶ浜町文化財調査報告書第2集 七ヶ浜町教育委員会

八巻正文 小林和彦 石川康治 鶴原 洋 1979 (昭和54年) 大木原貝塚一昭和52年度環境整備調査報告—七ヶ浜町文化財調査報告第4集 七ヶ浜町教育委員会

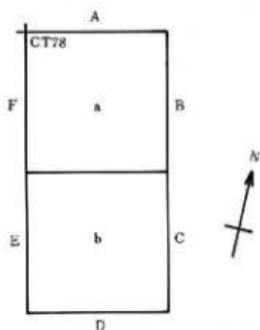


図版1 大木園貝塚の位置

卷之三十一

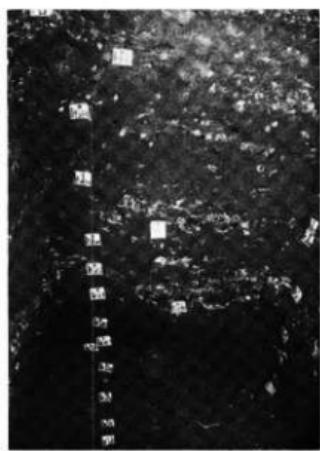
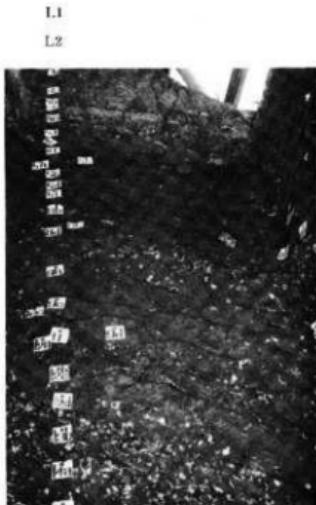


図版II 昭和53年度調査地区図



+<sub>CS78</sub>

1. CS77地区の発掘範囲 (1 × 2 m)  
断面の名称はA, B, C, D, E, Fとした



2. 断面Dの写真

図版III CS77地区

## II. 貝 器

CS 77 地点下層と CL50 地点（昭和50年度調査分）とをまとめて記載し、昭和52年度調査の CS 77 地点上層との比較も試みたい。

### イ. 貝 刃 (図版M~W、X、XI)

〈CS77 地点下層〉総数41点出土。内、28点が完形。素材は、ハマグリ28点、チョウセンハマグリ12点、オオノガイ1点である。上層の場合は、ハマグリとチョウセンハマグリの比率がほぼ同数だったが、この場合はハマグリが70%を占めている。オオノガイ製のものは当貝塚では初見である。腹縁部にきわめて細かいリタッチが観察される。LRは上層同様ほぼ同数で、殻種は貝刃の製作には特に関連はないと思われる。殻長は、表2で見るよう60~69mmのものが最も多く、拙野論文で紹介されている南境貝塚出土例（拙野、1971）と比較してみるとやや小型のものが多いようである。形態分類の特徴としては、上層の場合とほぼ同様の傾向が指摘できるので重複する記載は避ける。（昭和52年度調査報告参考）腹縁1/2調整、片面調整、一移調整など調整が簡易化された個体が上層の場合と比較してふえているのは、素材において、小型のハマグリの比率がふえていることと関連があろう。一般に調整が人念に施されるのは、大型もしくは殻の厚い素材などによく見られ、長40~50mmの小型の

ハマグリの場合は刃部の範囲も狭く、おむね簡易な調整で終っている。従って刃部の調整のちかいは素材の大きさや殻の厚さのちかいを物語るもので、特に機能的なちかいを物語るものとは思われない。なお、これら刃部の剥離状態は、石斧やスクレーパーなどの剥片右器の縁辺に見られる剝離状態とも類似する部分があるため、従来、これら石器の代用品的機能も類推されているのであるが、明確に使用痕の観察される例を1点紹

表1 大木貝塚出土貝刃殻長分類表

遺 点	C S 77 上 層		C S 77 下 层		C L 50		計
	殻 長	ハマグリ	チョウセン ハマグリ	ハマグリ	チョウセン ハマグリ	ハマグリ	
80mm以上		2	1		2		4
75~79		2		2	3		7
70~74		4		2	1		7
65~69	1		3	9	3		16
60~64	3			7	2	3	15
55~59	5			4		1	10
50~54	2	1		1			4
45~49	1					1	2
40mm以下	1					1	2
破 片	8	8	2	1	1	2	22
不 明				1			1
計	21	20	27	12	7	2	90

※オオノガイ1点は除く

表2 大木圓貝塚 C S 77下層、CL 50出土貝刀分類表

刃部の形態	調査	刃部状態	月幅	数量	素 材		器 型 式			CL 50 (大木2a)	
					ハマグリ	ショウセン ハマグリ	オオノガイ	大木3	大木2a3		
A. 耐候全般 (17点)	a. 背面 (7)	イ. 二段	① 2mm以上	3	1	2			3		
		② 2mm以下	1	1			1				
		ロ. 一段	① = 以上	1		1			1		
		② = 以下	2	1	1		1	1			
		リ. 刃上	① = 刃上	4	2	2		2	1	1	
		② = 刃下	3	3			2	1		3	
	b. 片面 (4)	イ. 二段	① = 刃上	2	2			1	1		
		② = 刃下	1	1			1			1	
	C. 耐候 3/4 (3点)	b. 片面 (3)	イ. 二段	① = 刃上	2		2		1		
		② = 刃下	1	1			1				
		ロ. 一段	① = 刃上	1	1			1			
D. 破損品 (17点)	a. 背面 (7)	イ. 二段	① = 刃上	5	2	3		1	3	1	
		② = 以下	2	2			1		1		
		ロ. 一段	① = 刃上	4	3	1		1	3		
		② = 以下	3	3			1	1		1	
		リ. 刃上	① = 刃上	1	1			1			
		② = 刃下	2	1			1	1	1		
	b. 片面 (4)	イ. 二段	① = 刃上	1	1			1			
		② = 刃下	2	1			1	1	1		
		ロ. 一段	① = 刃上	1	1			1			
	合 計	a. 15	イ. 29	① 23	41	28	12	1	17	17	2
		b. 12	ロ. 12	② 18							5
											9

介しておきたい。30は、刃部2/3ほどを欠損しているが、ハマグリとしてはやや大型の素材で、腹縁部での板厚も3.5mmと厚く、刃部調整も表裏両面にわたり入念に施された形跡が認められる。刃部は使用の為、相当に摩耗し、先端部の銳利さは失われ、幅1mmほどの厚さになっている。そしてこの部分では、刃部に直角方向の擦痕（使用痕）を明瞭に観察することができた。これは、特に刃部右端部で顕著であった。このことは、貝刀の使用に際して、刃部に対して直角方向の力を働かせたものということができる。このような機能は、従来いわれている石匙やスクレーパー的な機能とは異質のものということができよう。刃部のすりへり方から見れば、土器などの比較的やわらかいものの器壁を整形する際に生じたような印象を受ける。ただし、このように明瞭に擦痕を確認できた例はほとんどこの1点のみであり、これでもってすべての貝刀にこのような機能を想定することはいまだ早計というべきであろう。類例の増加を待ちたいところである。

〈CL.50 地点〉この地点は貝層が薄く大木2a式の單一層と見られている。CS 77 地点出土のもの

のは大木2b式以降のものが多いので、この地点はやや古い時期のものと考えてよい。計9点出土し、完形品は5点である。素材はハマグリが7点で、他は小片のため不明である。調整はいずれも片面調整で比較的簡易である。

なお、貝刀には内外いずれかの面に有機物が付着しているものが多く見られるが、この現象は特に貝刀に限定したことではないので貝殻の堆積過程において化学的現象として付着したものと思われる。

#### 〈文献〉

- 「昭和52年度大木町貝塚環境整備調査報告書」—貝器—七ヶ浜町教委（1979）
- 堀野宗俊「仙台湾周辺貝塚発見の貝刀について」（『仙台湾』創刊号、1971）

#### □、貝 輪（図版K、M）

〈CS 77下層〉7点、〈CS 77上層〉5点、〈CL 50〉2点出土。素材はイタボガキ10点、マガキ、ベンケイガイ、サルボウ、カズラガイ各1点である。完形品は2点で、他はすべて破片であるが、いずれも本来は輪状を呈するもの一部と考えられる。輪の幅は、マガキ、イタボガキ製のもので10~20mmでほぼ一定している。般の幅い二枚貝の場合は10mm内外である。全般に粗雑な調査のものが多いが6、9、10は入念な研磨が全体に施され、美術である。11はカズラガイの腹縁部を切りとったもので、切除した部分を研磨しているが、用途は不明である。8はイタボガキの殻頂部に、主として内面から刺突、穿孔したもので研磨調整などは全くない。この種のものを貝輪の未成品とする説もあるが、確証はない。

表3 貝輪一覧表

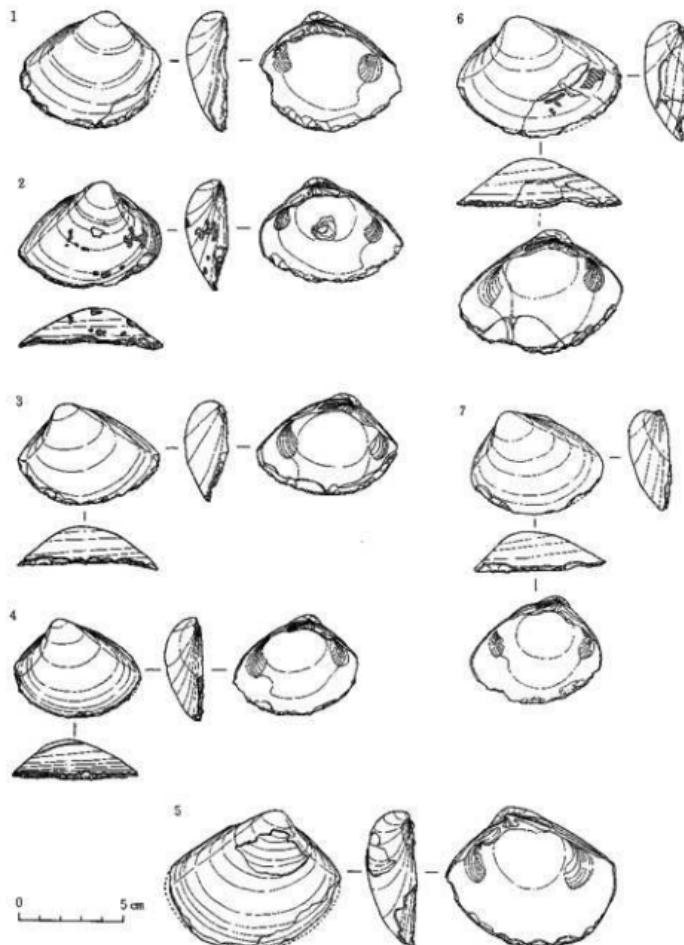
（CS77下層）

番号	貝 反	土型形式	未 研	既 研	形	研磨剖面	縦 × 横	内 長	幅	備 考
1	内壁	L5a	大 木	イタボガキ	R?	輪	横	67×38mm	40 mm	2/3丸切整形輪上層より出土（写真1）
2	*	*	*	R	*	外	縦	60×38	?	14~19 3/4丸
3	西壁	L5d	大木3、4	マ ガ キ	L	*	（=藍色）	92×76	49×38	14~24 （写真3）
4	*	*	*	イタボガキ	?	*	縫合全般	80×25	?	14~18 3/4丸
5	L14b	大 木 3	*	?	*	全	縦	80×34	?	11~12 （写真4）
6	L14e	*	*	L	*	*	縦	61	42	10~15 2/3丸
7	L14g	大木2a~3	*	?	*	縦	縦	60×39	?	10~11 3/4丸
8	L14h	大 木 3	*	R?	*	*	縦	60×35	?	10~12 3/4丸
9	声壁	L5b	*	ベンケイガイ	R	*	全	80×60	?	7~8 2/3丸切整形輪上層より出土（写真5）
10	L14f	大木2b~3	サ ル ボウ	*	*	*	縦	63×23	?	5~14 3/4丸
11	L14b	大 木 1	カズラガイ	?	?	切	縦	54×16	?	4.5~7 （写真6）
12	L14g	大木2a~3	イタボガキ	R	中央部穿孔	無	78×56	7×10	?	（写真7）

（CL50）

13	L2	大 木 2a	イタボガキ	?	輪	状	縦	67×38	?	15~19 2/3丸
14	L2b	*	*	?	*	*	（面貼）	63×29	?	12~17 2/3丸

＊（ ）内の数値は被削部の現況値

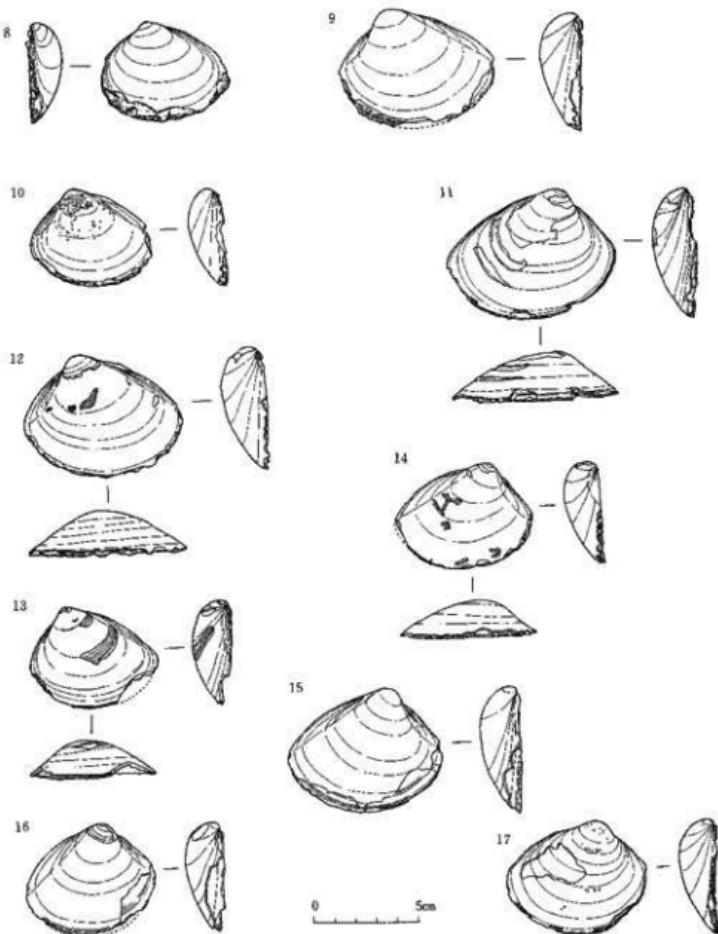


図版IV 貝刃図(1)

表4 貝刃一覧表(1)

(CS77下層)

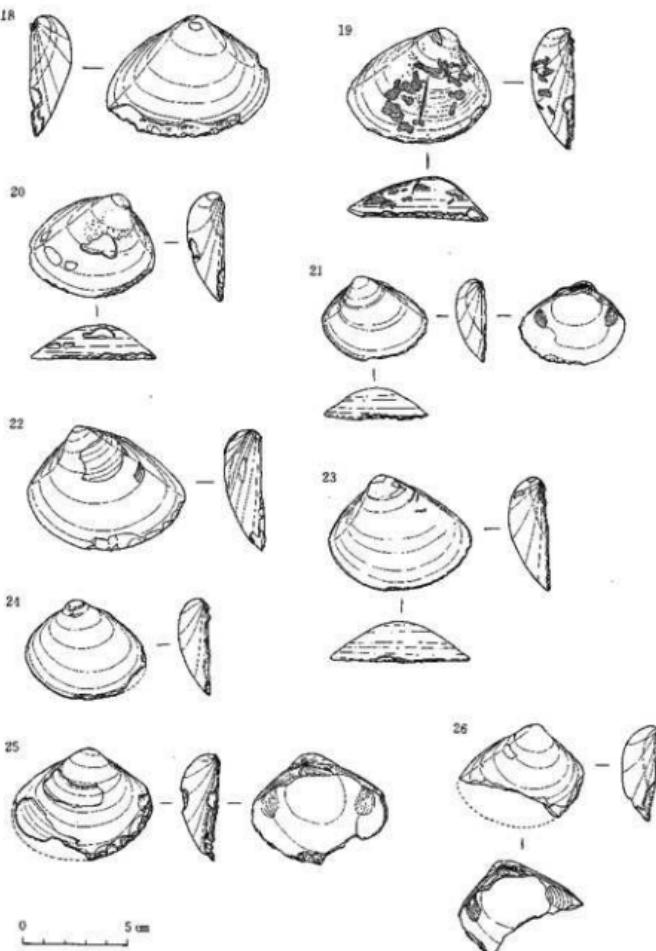
図No	層位	土壌剖面C	地 材	造 成	刀部の位置	直 接	内切状態	万 年	表×注	圖 名	
1	L14c	大木3b.	3	チョウセンハマグリ	R	底 縫合部	側溝	1.5~9mm	67X58	摩耗	
2	L14e	大木3b.	3	ハマグリ	R	+	+	1~5	68X31	船底中央穿孔部 光沢	(万葉1)
3	L14e	大木3b.	3	チョウセンハマグリ	L	+	+	1~3	67X49	摩耗	(万葉2)
4	L14h	大木3	3	ハマグリ	L	+	+	0~2	60X48		(万葉3)
5	L14e	大木3b.	3	チョウセンハマグリ	R	+	+	2~7.5	82X69	リタッチなし 刃用3/3破損	
6	L14e	大木3	3	チョウセンハマグリ	L	+	+	0~1	78X59	やや磨耗	
7	L14f	大木3b.	3	ハマグリ	L	+	+	0~2.5	63X51	光沢	



図版V 貝刃図(2)

表5 貝刃一覧表(2)

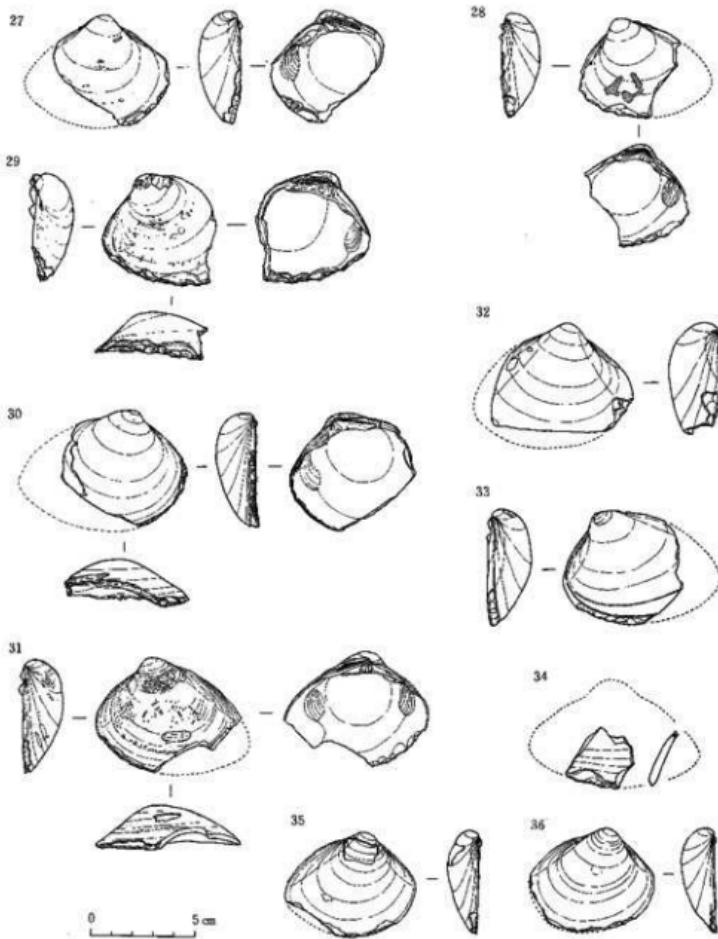
図No.	場所	土壌条件	素 材	形	刃部の位置	刺繫	刃部形状	刃 長	長×幅	備 考
8	L14a	大木 3	チヨクセンハマグリ	L	腹縫全般	片面	二段	2~8mm	61×49	光沢
9	L14d	大木 3	ハ マ グ リ	L	~	~	~	1.5~5	74×57	光沢
10	L14e	大木2b,3	ハ マ グ リ	L	~	~	~	1~3	58×47	摩耗。底。有機物付着
11	L15a	大木1~3	チヨクセンハマグリ	R	~	~	~	1~3	81×60	摩耗
12	L14a	大木 3	ハ マ グ リ	L	~	~	~	1~2	76×59	摩耗
13	L14d	大木 3	ハ マ グ リ	L	~	~	~	0.5~1.5	60×49	摩耗
14	L14e	大木2b,3	ハ マ グ リ	R	~	~	~	0.5~2	66×52	摩耗
15	L14b	大木 3	ハ マ グ リ	R	~	~	段	2~10	73×61	リタッチなし。やや摩耗
16	L15a	大木1~3	ハ マ グ リ	R	~	~	~	2~10	62×53	底縁3/4欠。やや摩耗
17	L14a	大木 3	ハ マ グ リ	R	~	~	~	0~2	66×55	摩耗



図版VI 貝刃図(3)

表6 貝刃一覧表(3)

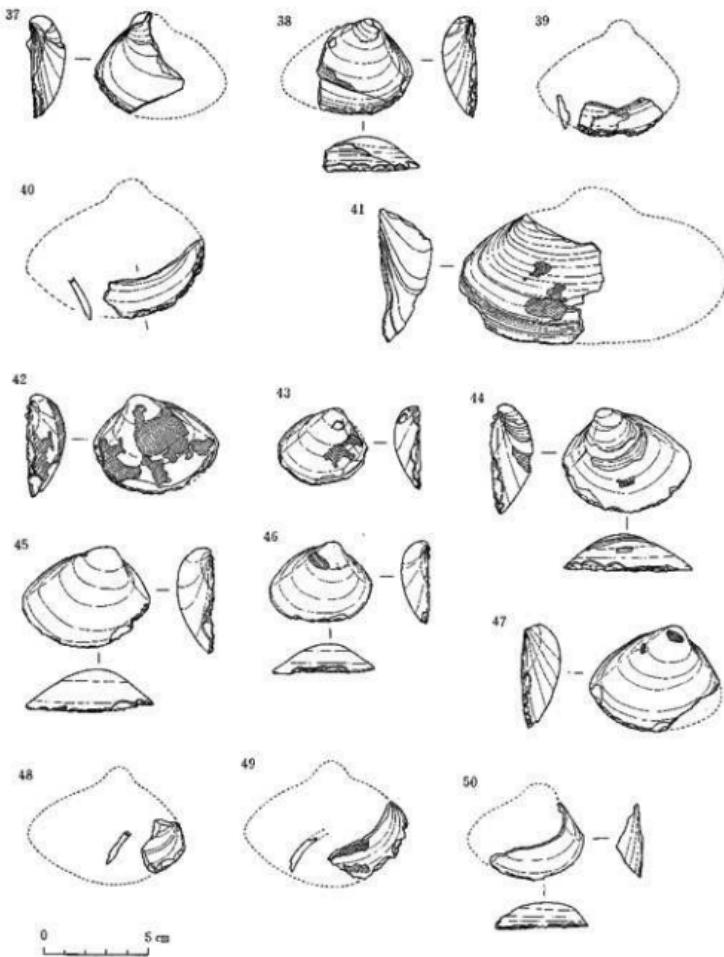
図No	層位	上部判式	形	材	数	刃部の位置	周長	刃部形状	刃	幅	長×幅	備考
18	L15a	人木1~3	テ・ウセンハマグリ	R	微縮左1/4	片面	—	波4~7.5mm	78×59	摩耗		
19	L144	人木3	テ・ウセンハマグリ	R	微縮右3/4	片面	三	波1~3	69×58	摩耗、有機物付着	(刀長7)	
20	L146	大木3	ハマグリ	R	*	片面	二	波0~2	60×50	摩耗		
21	L14e	大木2b,3	ハマグリ	L	微縮右1/3	片面	—	波0~1	50×40	光沢	(刀長8)	
22	L14e	大木2b,3	ハマグリ	L	*	片面	二	波1.5~6.5	26×60	摩耗		
23	L15a	人木1~3	ハマグリ	L	—	片面	—	波0~1	68×56	やや摩耗		
24	L14e	大木3	ハマグリ	L	—	片面	—	波2	58×48	刃部端や中摩耗		
25	L14e	大木3	ハマグリ	R	?	片面	二	波2~5	65×54	微縮1/2欠		
26	L14f	大木2b,3	ハマグリ	R	?	片面	二	波2~5.5	60×49	微縮1/2欠		



図版VII 貝刃図(4)

表7 貝刃一覧表(4)

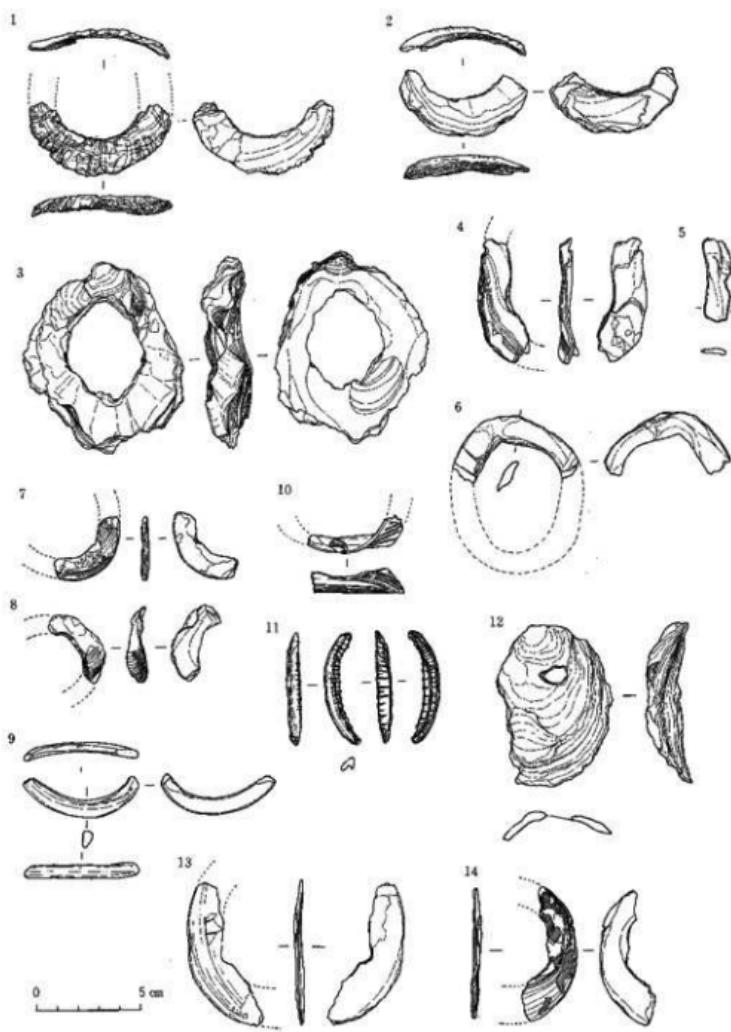
図No	層位	土類型&C	高さ	材質	殻	刃部の位置	測定	刃部形状	刃幅	長×幅	備考
27	L14f	大木2b, 3	テ・ウセンハマグリ	R	?	両面	二段	1~4mm	62×57	腹縫2/3次。厚託。	
28	L14f	大木2b, 3	テ・ウセンハマグリ	L	?	?	?	~	1~2	63×50	腹縫1/2次。
29	L14g	大木2a~3	テ・ウセンハマグリ	L	?	?	?	~	2~6.5	64×60	腹縫1/3次。
30	L14d	大木 3	ハ・マ・グ・リ	R	?	?	?	~	1~2	63×55	刃部に腹縫。腹縫2/3次。(弓背?)
31	L14g	大木2a~3	ハ・マ・グ・リ	L	?	?	?	~	1~2.5	65×56	腹縫1/2次。厚託。
32	L14h	大木 3	ハ・マ・グ・リ	R	?	片面	~	~	1~8	63×63	厚託。
33	L14e	大木2b, 3	ハ・マ・グ・リ	L	?	?	?	~	2~3	60×58	腹縫1/2次。光沢。
34	L14e	大木2b, 3	テ・ウセンハマグリ	L, ?	?	?	?	~	2~5.5	68×69	逆刃。厚託。
35	L14f	大木2b, 3	ハ・マ・グ・リ	R	?	?	?	~	1.5~3	63×52	腹縫1/3次。光沢。
36	L14g	大木 3	ハ・マ・グ・リ	R	?	?	?	~	0~1.5	59×50	光沢。



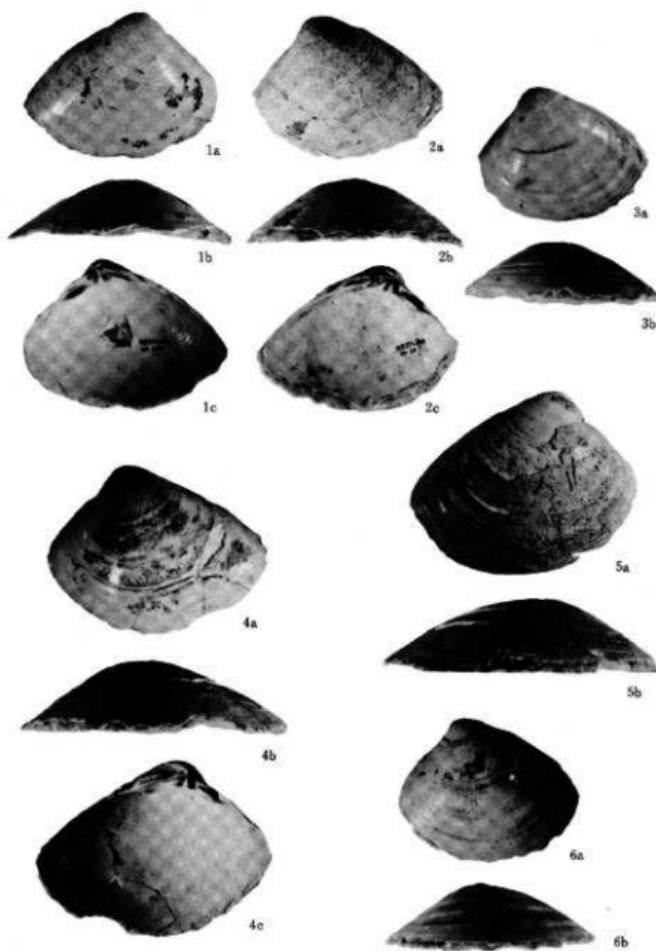
図版VII 貝刃 図(5)

表8 貝刃一覧表(5)

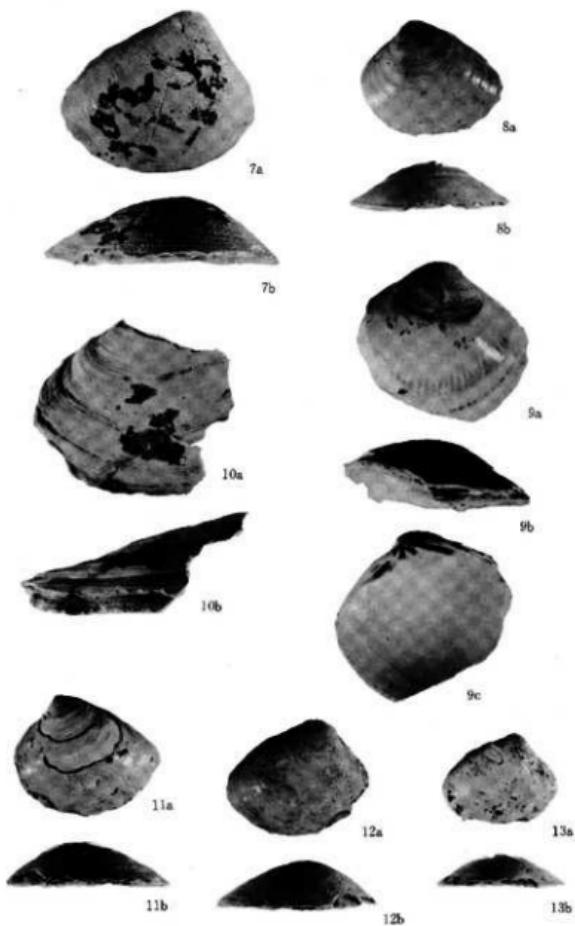
図版No.	層	地	土器形式	実	付	記	刀剣の位置	断面	刃先の形	刃 長	最大径	層	名	
37	L14f	大木	b.3	ハ	マ	ダ	?	L	?	?	片削	2.2mm	46×49	裏縫2/5欠。やや磨耗
38	Vn+L1	大木	-i-3	ハ	マ	ダ	?	R	?	?	板	1-3	46×46	裏縫1/4欠。光沢
39	L14m	大	木.3	ハ	マ	ダ	?	?	?	?	板	2	46×48	端片
40	L14c	大	木.3	ハ	マ	ダ	?	?	?	?	板	0.5-2.5	46×49	端片
41	L14f	大木	b.3	?	?	?	?	L	?	?	板	1	46×44	裏縫2/5欠。(写真10)
(CL30)														
42	L.2	大木	a.2	ハ	マ	ダ	?	L	板削小斜	片削	?	?	59×48	裏縫。有機物付着。
43	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	R	-	?	板	1-5	43×35	裏縫。
44	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	L	-	?	板	0-4.5	61×49	(写真11)
45	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	R	-	?	板	0-3	60×49	裏縫。
46	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	R	裏縫中1/2	?	?	1-2.5	49×37	やや磨耗。(写真13)
47	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	R	?	?	板	1-5	60×49	裏縫1/2%。光沢。
48	-	-	-	ハ	マ	ダ	?	R	?	?	板	2-3.5	60×48	1/4%。裏縫。
49	-	-	チャウセンマダラ?	ハ	マ	ダ	?	R	?	?	板	2	60×40	1/4%。裏縫。
50	-	-	チャウセンマダラ?	ハ	マ	ダ	?	R	?	?	板	0-1	60×40	1/2%。裏縫。



図版IX 貝輪図



図版X 貝刃写真 ×3/5



図版XI 貝刃写真 ×3/5



図版XX 貝輪写真 ×3/5

### III. 骨 角 器 (図版VII、XIV、XV)

〈CS 77下層〉計5点出土。内訳は櫛2、玦状耳飾、骨匕、刺器各1である。

#### イ. 櫛 (1・2)

2点とも素材（獸骨または鹿角）を縦に半截して細かい彫刻や研磨を加えた堅櫛である。1は部分的な破損が見られるが、全形復原は可能で、平面形は細長い長方形で、断面形はアーチ型を呈する。長さは、現況で18.7cmだが完形品としては20cm以上に達するだろう。内外両面とも入念に削りおよび研磨が施されている。厚さは、最も薄い上端部で1mmである。全般にきわめて薄く、破損しやすい。中軸線の上下に径4mmの円孔を穿ち、それを結ぶ形で縦に幅1mmの切り込みが入っている。周縁部には、下半2/3の部分に二重の山形の刻みと径3mmの円孔が6単位分、左右対象に配置されている。上半1/3には細かい刻みが施されている。このような装飾を施した骨角器の類例に、CS 77上層出土の装飾品がある。（七ヶ浜町教委、1979）上半部では径3mmの円孔が一対と小孔が一ヶ穿たれるのみである。なお穿孔はいずれも両面からのものである。また、文様体を三分するかのように縦の稜線が中央の切り込みをはさんで2本入る。齒の部分との境には横方向に二条の隆線が彫りだされている。これは、骨櫛において各時期を通じて共通的に見られる特徴的なもので、裏側には見られない。櫛口によれば、（櫛口、1939）骨櫛は植物性櫛の模造であり、齒との境の二条線は、齒を結束した場合の紐を意味しており、骨櫛の場合機能的には意味はないが、櫛の結束部を示す「痕跡器官（Rudimentary Organ）」と名づけている。齒は7本である。完存していないが現存長は8.1cmで、断面はほぼ円形である。先端にゆくほど齒と齒の間隔は広がる傾向を見せていている。2は、齒を2本欠失しているがあとは完存している。齒の数は5本である。本体部分には周縁部の刻みや孔など一切見られずシンプルである。しかし、齒との間に二条線が彫り出されている点、本体中軸線上に縦の切り込みと二つの穿孔が施される点は1と全く共通している。1と比較すると全体に細身だが厚さは2~3mmと厚い。全体に研磨は入念に施され、光沢もあり、きわめて保存良好である。

時期的には、いずれも大木1~3式期の所産で、県内ではもとより、全国的にも最古のものに属する。また、これまでの県内での骨櫛の発見例はきわめて少なく、未発表のものを含めても10点内外と思われる。その中には、石巻市沼津貝塚（櫛口、1939）、鳴瀬町川下り櫛貝塚出土例（櫛口、1939）などが著名である。大木圓貝塚では過去に3点確認されている。このうち沼津貝塚出土例を除き、ほとんどが破損品もしくは破片で、今回のように本体と齒の部分とがそろってほぼ完形に近い形で発見されることはきわめて稀と言えよう。

#### ロ. 现状耳飾 (3)

獸骨製で半欠品である。従来、石製、土製のものはしばしば発見されるが、獸骨製はきわめ

て珍しい。形態は下部がやや長く、下端が尖っているのが特徴的である。調整はきわめて精巧で、研磨も入念である。断面は、上部は逆三角形で下部は扁平である。光沢あり、保存良好である。

#### ハ. 骨匕 (4)

シカ尺骨の一端を切りとり、研磨を加えて先端を尖らせたもの。研磨はやや難である。基部は一部破損。

#### 二. 刺器 (5)

鳥管骨の一端を縦に半割りし、研磨を加えて尖らせた簡単なもの。

〈C L 50〉計8点出土。内訳は、刺器3点、釣針2点、骨針1点、不明品1点である。

#### イ. 刺器 (6, 7)

いずれも鳥管骨製で、一端を縦割りし、研磨を加えて先端を尖らせた簡易なもの。素材の幅は5~9mmである。CS77上層では獸骨および鹿角製で入念に研磨されたものもよく見られたが、それとは対照的である。

#### ロ. 釣針 (8~9)

2点出土。いずれも破損品。8は先端が残存しており、かえりがない。9は基部と先端が欠損しているが、下端部が尖り気味である点、8と形態的に若干異なる。しかし、いずれもこの基部から鉤部への屈折部の幅が11mm、14mmと広いのが特徴的である。

#### ハ. 骨針 (10)

両端部が欠損している。獸骨の一端に穿孔し、全体に入念な研磨を施したもの。

#### 二. その他 (11~12)

11は小さなかえりをもつポイント状の鹿角製品である。一端が破損しているが、全体に入念な研磨が及んでいる。刺突具的機能が想定されるが確認はない。

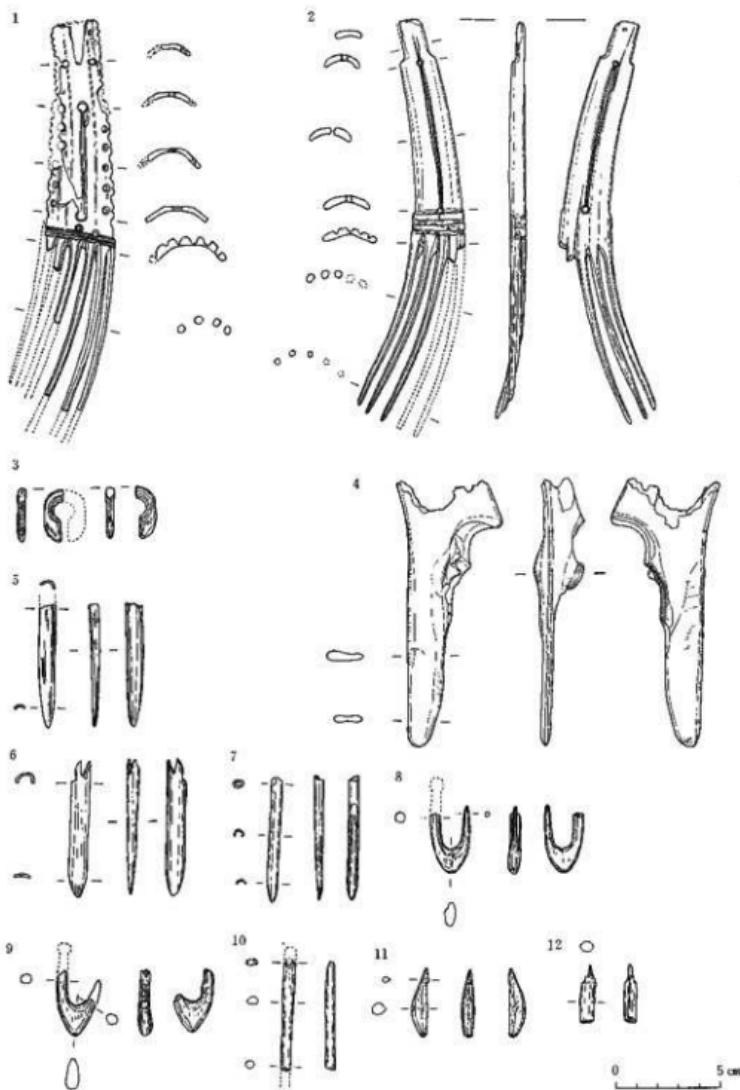
#### 〈参考文献〉

七ヶ浜町教育委員会「大木出貝塚昭和52年度環境整備調査報告」1979年3月

樋口清之「日本先史時代人の身体装飾(上)(下)」(『人類学先史学講座』13、14) 1939年12月

骨角器一覧表

(CS77下層)										
No.	種	位	寸	期	種	材	底	形	刺	頭
1	L14e	大木2b.3	鳥	直	直	骨	半	半切	全頭研磨	穿孔
2	L15a	大木1~3	根	直	直	骨	半	半切	全頭研磨	穿孔
3	西壁L59d	大木4	焼灰	食	鶴	竹	全	直	25×(9)	3.5
4	L14b	大木3	骨	比	直	骨	直	直	刺	研磨
5	L14c	大木2b.3	刺	直	直	鳥管骨	直	直	刺	研磨
(CL50)										
6	L2	大木2a	刺	直	鳥管骨	直	直	刺	先	直
7	L2	~	刺	直	鳥管骨	直	直	刺	先	直
8	L2	~	刺	直	鳥管骨	直	直	刺	先	直
9	L2	~	刺	直	鳥管骨	直	直	刺	先	直
10	L2	~	針?	直	鳥管骨	直	直	刺?	全頭研磨	穿孔
11	L2	~	不明(骨突?)	直	鳥管骨	直	直	刺?	全	直
12	L2	~	未	直	鳥管骨	直	直	刺?	全頭研磨	穿孔



圖版三 骨角器



1a



1b



1c



2a

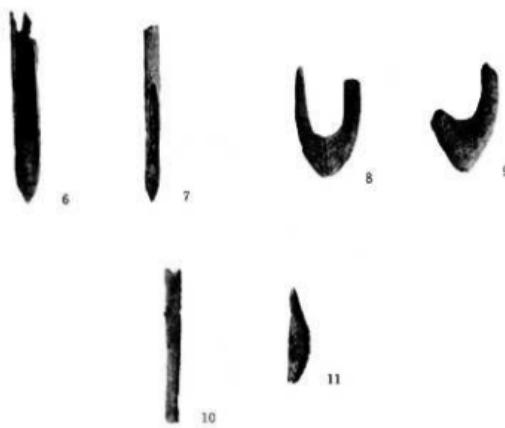


2b



2c

圖版四 骨角器(1) 楠  $\times 3/5$



図版四 骨角器(2)  $\times 3/4$

## IV. 石器

今回はFF60・61区、CL50区、CS77区の石器を扱った。

石器は石鎌・石匙・麓状石器・石槍・二次加工ある剝片凹み石・叩き石・有溝石器にわけられる。

石鎌とは剝片を素材とし、片面或は両面に調整が加えられた小形で三角形を呈するものをさす。基部の形態から平基・凹基・凸基にわけられるが、今回は凹基だけである。No28のように形態的には石鎌に属するが、大きさの点でその範疇に属するか不明のものもある。

意図的につまみ部を作出したと考えられる石器を石匙とする。その形態・加工は多様である。

麓状石器は八幡一郎(1935)9分類によれば凸レンズ状を呈するものと両刃状のものとにわけられるが、今回とり上げたものは前者1点だけである。

両面を平坦剝離により調整され、尖端部が作出された、柳葉形、木葉形のものを石槍と呼ぶ。

剝片になんらかの二次加工を施したもの全て、二次加工ある剝片と呼ぶ。一般には、スクレーパー・削器などに分類されるが、その基準は不明確であり、将来の研究で細分が可能になる多様な器種を含んでいると考え、今のところは二次加工ある剝片と呼びたい。しかし一器種としてなりたつものではない。なお使用痕ある剝片と称されるものも、その実態は極めてあいまいであり、一器種としてなりたつものでもないので分類項目として今回は使わなかった。

剝片はそれ以前の剝離面を残す方を背面・主要剝離面を腹面と呼び、両面加工等で背腹の区別がつかない時はa、b面であらわす。

石器は上器型式との対比が不明なので層ごとに記述したい。

### FF60、61区

層序区分が両区で違うため、別々に扱った。

(FF60区)

#### 2層

##### 1. 二次加工ある剝片

打面は小さく、末広がりの形態で末端がヒンジフラクチュアを呈する剝片の背面右側辺に調整がある。腹面右下端に、火によると考えられるはじけがある。

#### 2f層

##### 2. 石匙

整った両面加工の縦形の石匙で、厚いレンズ状の断面を呈する。つまみ部の作り出しは浅い。

半欠

4c層

### 3. 石匙

軽くわん曲した細長い縦形の石匙、片面加工で、背面は重り合った平坦剝離で全面が覆われる。つまみ部は小さく、幅も厚さも中央が最大である。尖端部は段のつくように細く加工されおり、腹面には若干の不規則な剝離がある。

### 4. 二次加工ある剥片

打面部と腹面両側邊に不規則な調整が施される。

4c-e層

### 5. 剥片

縦長の剥片であるが、背面の剝離方向は一定せず、二次加工も見られない、下半が欠損している。

### 6. 二次加工ある剥片

横長の剥片の腹面に基部を除いて全局に、連続した細い調整を行っている。背面は打面部から比較的大きな剝離が入る。

4d層

### 7. 石鎌

無茎で基部が内わんする石鎌。b面に素材の面を残す。尖端欠損

### 8. 石鎌

無茎で基部が内わんする石鎌・a. b両面に素材の面を残す。

### 9. 石匙

a面右側邊は直線的で、左側邊は外わん曲する縦形の石匙。つまみ部は熱による損傷をうけ、下部はa面からの力により折損している。a面は全面平坦剝離により調整されているがb面の調整はつまみ部付近のみである。

5b層

### 10. 范状石器

厚い剥片の背面両側邊と末端に急角度の粗い剝離を施す。断面はかまぼこ形を呈す。

5c層

### 11. 凹み石

長方形の砂岩両面に打撃による凹みがある。他に縦に走る擦痕が見られる。

7層

### 12. 叩き石

下端に敲打痕がある半欠

13. 石匙

縦長剝片に周辺加工を施した、縦形で末広がりの石匙、両側辺は軽く内わんし、下端も内わんする。腹面に調整はなく、下端の一方を若干折損する。

8a層

14. 剥片を折断し、打面部尖端としてその周辺に調整を加えているが側辺が折損している。石鎌の未製品とも考えられる。

〈FF61区〉

aL3イ層

15. 二次加工ある剥片

剥片の背面右側辺に調整を加えている。下端折損。

aL4層

16. 石鎌

無基で基部が内わんする石鎌。両側辺はほぼ直線的である。両面に素材を残し周辺部のみを調整するが、尖端部は段がついている。尖端部折損。

bL4ハ層

17. 石匙

比較的厚い剥片につまみ部を作出し、さらに背面に周辺調整を施し、靴形を呈する石匙。

bL4ニ層

18. 石匙

形態的には17に似るが素材を横に使う点が異なる。腹面も打面部が特に入念に調整されている。

aL5層

19. 二次加工ある剥片

剥片を折断し、背面両側辺と基部を調整している。

bL6層

20. 有溝石器

砂岩製の石の両面に幅5—8mm、深さ2~3mmの溝がa面に3本、b面に6本ある。

〈CL50区〉

人木2a式に伴出したと考えられる石器である。

1b層

21. 石鎌

無茎の石鎚で基部は内わんする。b面に素材の面を残した尖端部は折損している。

2層

## 22. 石槍

側刃が軽く外わんする。両面とも細く剝離面が重りあっている。断面はレンズ状を呈し、尖端部と基部を折損する。

## 23. 石槍

両面が粗い剝離で調整されている。製作途中で折損した可能性もある。

## 24. 二次加工ある剝片

背面先端部に急角度の調整を加え細いくちばし状に作り出している。打面部折損。

## 25. 石匙

錐形石匙。背面全面を調整し、なぎなた状を呈する。

2 a層

## 26. 石匙

錐形石匙、肉側辺は直線的で下端に向かつて軽く開く。両面を整った平坦剝離で調整し下端が軽く内わんする。

## 27. 凹み石

両面のほぼ中央に敲打による凹みがあり、周辺部には擦痕も見られる。3辺が折損している。

2 c層

## 28. 石槍

両側辺がほぼ平行する人形の石槍である。両面に粗い剝離を施した後にa面側辺を細かく調整している。加工から見て、残存部は基部と考えられる。断面はかまぼこ形を呈する。

2 e層

## 29. 不明

中央の円盤状の部分から両側に出た棒状部には横走する研磨痕あるいは擦痕が見られる。

2 f層

## 30. 二次加工ある剝片

横長の剝片下縁の両面に不規則な剝離痕が見られる。

不明層

## 31. 二次加工ある剝片

剝片の1側辺に不規則な剝離痕がみられる。

## 32. 石匙

両側辺のほぼ平行した錐形の石匙、両面加工であり、特にb面縁辺の調整が細い。半欠。

CS77区

1層

33. 石鎚

無茎で基部の軽く内わんした石鎚、両面加工で、左右非対照である。

aL8d層

34. 二次加工ある剝片

剝片を一部加工した後に両側辺を折断し、交わる部分が鋭い縁辺となっている。

l3b層

35. 二次加工ある剝片

剝片の打面部折損、末端に不規則な二次加工がある。

bL13bf層

36. 二次加工ある剝片

剝片左側辺が折損し、右側辺に規則的な調整が施されている。

14d層

37. 石鎚

無茎で、基部の内わんする大形の石鎚である。側辺は軽く外わんしている。鉛先の可能性もある。

14f層

38. 二次加工ある剝片

剝片の打面部を除去する加工を施す。

14h層

39. 二次加工ある剝片

剝片の打面部と末端を背面から腹面側に調整した後に、その部分を打面として背面側にステップフラクチャーになるような調整を加えている。左側辺は折損し、右側辺には不規則な剝離が見られる。

15a層

40. 石匙

片面加工。小形で尖端部に向って左側辺は軽くふくらみ、右側辺は直線的に収束する縦形の石匙と考えられるが、上部が折損しているので不明確である。

16a層

41. 石匙

背面はほぼ全面調整が加えられ、腹面には不規則な剝離痕が散見する。

## 42. 石匙

縦長の剝片・背面を急角度で調整し、側辺は先端部に向かって軽く外わんしている。腹面に調整痕はない。

(梶原 洋)

出土石器一覧 (K. は実機図と符号)

## FF 60区

K.	層位	器種	大きさ(最大幅×最大厚 mm)	石材	加工部位	備考
1	2	二次加工ある剝片	4.86×4.08×0.67	頁岩	背面右側辺に調整	腹面右下端にはじけ
2	2f	石匙	3.13×1.66×1.11	めのう	両面加工	下部折損
3	4e	石匙	8.97×1.57×0.82	頁岩	片面加工	尖端部、つまみ状に作出
4	4e	二次加工ある剝片	2.94×2.28×0.79	頁岩	腹面縁辺に不規則な剝離	下部折損
5	4e-c	剝片	3.5×2.0×0.62	なし		下部折損
6	4e-e	二次加工ある剝片	2.36×4.84×0.34	頁岩	腹面全周に調整	
7	4d	石鏃	1.78×1.56×0.34	頁岩	一部に素材の血を残す。	先端折損
8	5a	石鏃	2.34×1.75×0.4	頁岩	腹面に素材の面を残す。	ほぼ完形
9	5a	石匙	6.13×3.12×0.96	頁岩	片面加工	つまみ形、熱による 研磨末端鋸歯
10	5b	塊状石器	4.32×3.68×1.62	頁岩	片面加工	基部折損
11	5c	凹み石	11.0×7.14×2.15	砂岩		深痕も見られる。
12	7	ハンマーストーン	8.25×5.54×3.5			半欠
13	7a	石匙	6.48×3.82×0.64	頁岩	片面加工	下端一部折損
14	8a	二次加工ある剝片	2.70×1.86×0.41	頁岩	インバースリタッヂ	石核未製品の可能性 尖端折損

## FF 61区

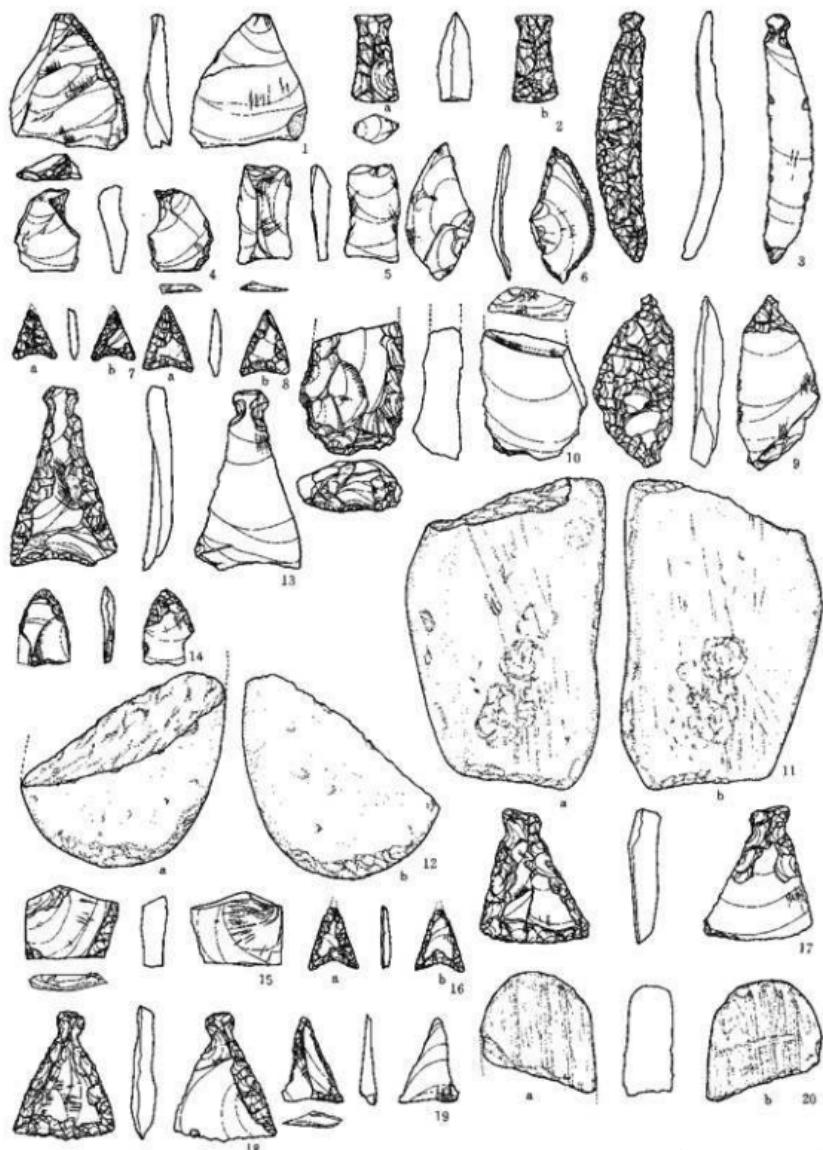
15	al.3イ	二次加工ある剝片	3.01×3.68×0.82	頁岩	背面右側辺に調整	下半折損
16	al.4	石鏃	2.2×1.75×0.26	頁岩	両面に素材の面を残す	尖端折損
17	bl.4ハ	石匙	5.52×3.88×0.94	頁岩	つまみ部を除いて片面加工	
18	bl.4ニ	石匙	4.62×3.63×0.91	頁岩	背面凸辺調整	剝片を横につかっている
19	al.5	二次加工ある剝片	3.01×2.16×0.46	頁岩	背面高辺に調整	下半折損
20	bl.6	有縫石器	3.92×4.27×1.65	砂岩	表面に9本の縫	半欠

## CL 50区

21	1b	石鏃	1.58×1.13×0.22	頁岩	片面に素材の血を残す	尖端折損
22	2	石槍	6.43×1.82×0.69	頁岩	両面を重りあつた平出剝離で調整	尖端部折損
23	2	石槍	4.48×3.64×1.50		両面を削い平出剝離で調整	半欠
24	2	二次加工ある剝片	4.24×2.08×0.54	頁岩	背面尖端部に急角度の加工	基部折損
25	2	石匙	6.32×2.05×0.88	頁岩	背面全面を調整	完形
26	2a	石匙	6.72×2.55×0.85	頁岩	両面を整った平出剝離で調整	完形
27	2a	凹み石	7.82×7.08×2.12	不明		一部欠損
28	2e	石槍	7.54×3.50×1.60	頁岩	両面を粗い剝離で調整	半欠
29	2e	不明	3.86×2.08×1.67	砂岩		体部剥落し両端も欠損
30	2f	二次加工ある剝片	3.63×5.54×1.03	頁岩	剝片下端の両面に不規則な剝離あり	
31	不明	二次加工ある剝片	4.1×2.56×1.08	頁岩	腹面右側辺に細い剝離	欠損
32	不明	石匙	4.38×1.89×0.75	頁岩	両面を粗く調整	半欠

CS 77区

33	1	石錐	2.75×1.54×0.48	頁 岩	両面加工	左右井対照
34	aL 8 d	二次加工ある剝片	3.28×2.94×1.02	頁 岩	折削により刀部作出の可能性も	
35	13b	二次加工ある剝片	3.77×2.44×1.04	頁 岩	末端に不規則な調整	上半折損
36	bL13b f	二次加工ある剝片	3.88×1.96×0.77	頁 岩	背面右縁辺に調整剝離	左奥辺折損
37	14d	石錐	4.29×2.88×0.94	不 明	両面加工	無基の右縁辺に形態的 に似る
38	14f	二次加工ある剝片	4.95×2.57×0.93	頁 岩	両面打抜部を除去	
39	14h	二次加工ある剝片	4.48×4.17×0.97	頁 岩	背面腹面上下に調整	背面右縁辺折損
40	15a	右匙	2.93×1.09×0.55	不 明	片面加工	上半折損
41	16a	石錐	2.66×5.31×0.90	頁 岩	片面を全面細い剝離で調整	打面部折損
42	16a	石錐	8.27×1.95×0.95	頁 岩	片面加工	完 形

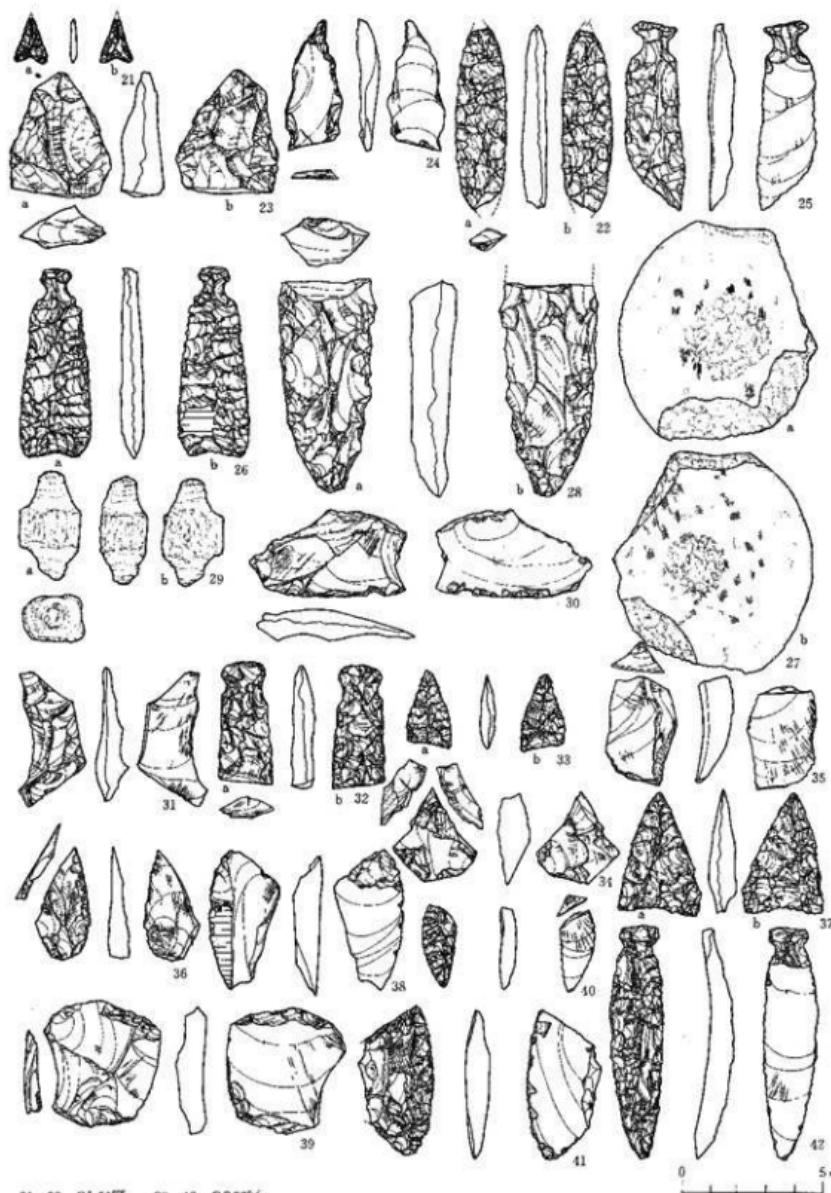


1-14 FF60区 15-20 FF61区

1. 2号 2. 2号刮 3. 4. 4c型 5. 6. 4c型 7. 4d型 8. 9. 5a型 10. 5b型 11. 5c型 12. 7号 13. 7a型 14. 8a型  
15. aL3号刮 16. aL4号刮 17. bL4号刮 18. bL4号刮 19. aL5号 20. bL6号

图版XVI 石器(1)

FF60+61区石器剥刮器 Scale 1/2



21~32 CL50区 33~42 CS77区

21. 16mm 22~25. 2mm 26, 27. 2mm 28. 2mm 29. 2mm 30. 2mm 31, 32. 不明 33. 1mm 34. 1.8mm 35. 1.3mm  
36. 1.3mm 37. 1.4mm 38. 1.4mm 39. 1.4mm 40. 1.5mm 41, 42. 1.6mm

图版X 石器(2) CL50区·CS77区石器实测图 Scale 1/2

## V. ウミガメ

ここではCF42地区を中心に、CF41、CF43、CI41地区を取り扱う。出土量についてはCG41、CH42、CR41、DF45、DF48地区を加えておく。整理作業は、すべてが終了しているわけではなく、亀甲については対象としていない。なお亀甲は各地区で多量出土している。また、同定作業に不十分な点が多く、現段階で不明なものについては除外している。つまり、途中経過報告といった程度のものである。詳細については、本報告でなされることになっている。

まず上述の地区で出土した個体数は、頭骨から見て6個体以上である。これらの大きさは、バラつきがあり、亀甲の大きさで推定50cmから100cmに及ぶと考えられる。層位と接合関係については以下のとおりである。

頭骨 CF42L 7b-f-g, CF42L 7f-h, CF42L 6a-l, 7g, CF41L5-CI41L5  
marginal CF42L 7f-g

さて表11、12を見ると、頭骨は CF42L 7f、L 7g に集中している。頸椎は CF42L 7c、L 7f に集中し、前後肢関係では CF42L 7c、L 7f を中心に全体的にばらつき、また CI41L5 からまとまって出土している。marginal はそれほど集中度がなく、CF42地区以外では CI41L5 に集中しているのが立つ程度である。頭骨が他の骨と違った出土状況を呈していることが想定できよう。つまり頭骨以外の骨がより上層から出土している。左右骨の分布差については指摘することができない。層位について触れておくと、アルファベット小文字で記されている細かい層位（註1）は、それほど時間差がない点を指摘できる。しかし遺物の遺存状況など他の要素を加味しなければならないので、上述の点は参考程度にとどめたい。

さて大木園貝塚から出土したウミガメは如何なる種類のものか。結論から先に言えアカウミガメである。亀甲からは、アカウミガメかアオウミガメであることが理解される。さて現在まで理解された両者の違いは、主に肩甲骨と xiphoplastron にある（図版 XIX）。肩甲骨については同大のカメで比較するとすれば、アカウミガメの方が小さく、先端近くの巾が広く、ずんぐりとした感じである。xiphoplastron は hypoplastron に取り付く部位の形態が違う。アオウミガメはいわゆる S 字状に近い形態をしているが、アカウミガメのそれは直線的である。以上が、見てわかる違いだが、頭骨についても鼻骨の立ち上がりがアオウミガメの方が強い。つまり、額が高い。以上の点から、大木園貝塚出土のものはアカウミガメと理解された。図版 XVIII にアオウミガメ（2-3才？）の頭骨、亀甲の実測図を載せているので参考にされたい。

以上記すにあたって、標本作成には松島水族館にお世話いただいた。また各部位名称については、小宮孟、梶原洋、松井章の諸氏に御教示していただいた。感謝の意を表したい。（佐久間豊）

（註1）八巻正文 1978 大木園貝塚一昭和49年改築整備報告書第3集 (pp.1-2)

表11 大木田貝塚各地区・各層位ウミガメ出土量 (1)

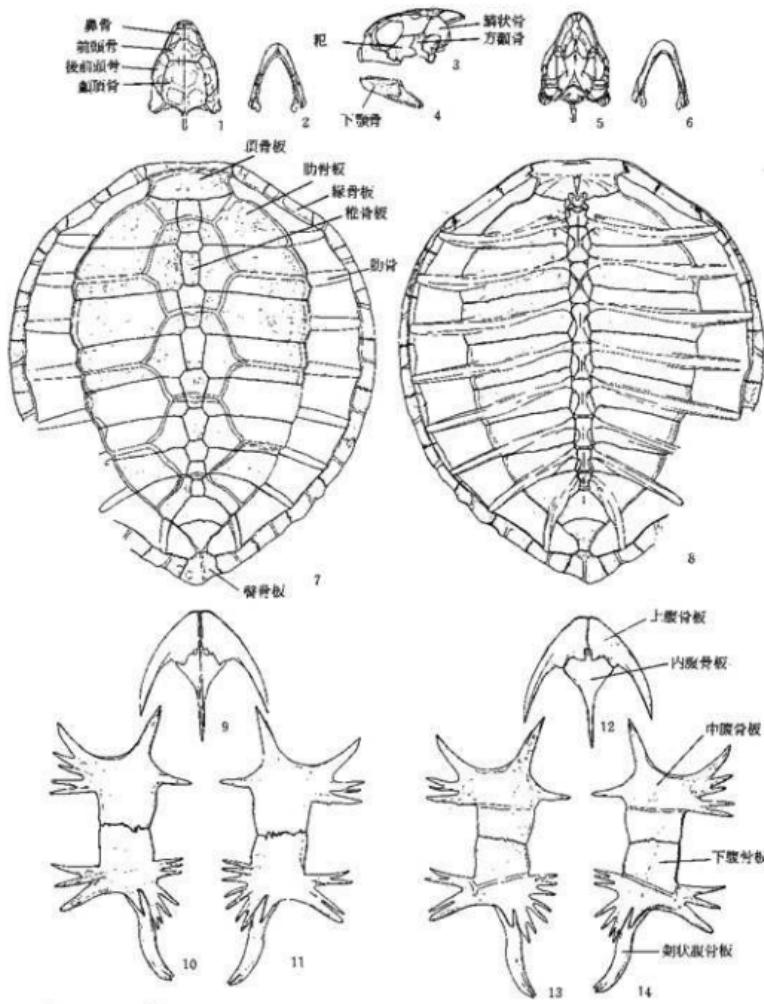
地区・層位	縦			横			層位			層位			層位			層位			層位		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
C F 43層位	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
L 6a	1	1																			
L 6c																					
L 7																					
L 7a																					
L 7b		2	1	1	1												1	1	1	1	
L 7c																		1	2	1	
L 7d	1																			1	
L 7f	1	3	2	3	1	1	3	2	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	
L 7g	2	1	1	1	2	1	3	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	
L 7h	1																		1	1	
L 8a																					
L 8b		1																			
C V 43L 5		1																			
L 6																					
L 7f																					
C F 43L 6a																					
L 6b																					
L 6c																					
aL 7b																					
bL 7b																				1	
C G 43層位																					
L 4																				1	
L 5																					
C H 43L 4																				1	
C L 43層位																					
L 5	2																				
L 6																					
L 7																					
D F 43L 2a																				1	
D F 43L 1																					

※添字はそれぞれ、1は第1横幅のようになっている

表12 大木田貝塚地区・各層位ウミガメ出土量 (2)

地区・層位	縦			横			層位			層位			層位			層位			層位		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
C F 43層位	1						1				1										
L 6a																					
L 6c																					
L 7							2														
L 7a							1														
L 7b		1	1					3	1												
L 7c		1																			
L 7d																					
L 7f		1	1																		
L 7g																					
L 8a																					
L 8b																					
C V 43L 5																					
L 6		2																			
L 7f																					
C F 43L 6a																					
L 6b																					
L 6c																					
aL 7b																					
bL 7b																					
C G 43層位																					
L 4																					
L 5																					
L 6																					
L 7																					
D F 43L 1																					
D F 43L 2a																					
D F 43L 1																					

※添字番号は図と対応



1 頭骨背面 2 下顎骨腹面 3 頭骨右側面 4 下顎骨右側面 5 頭骨腹面  
6 下顎骨腹面 7 骨甲背面 8 骨甲腹面 9・10・11 骨甲腹面 12・13・14 骨甲腹面

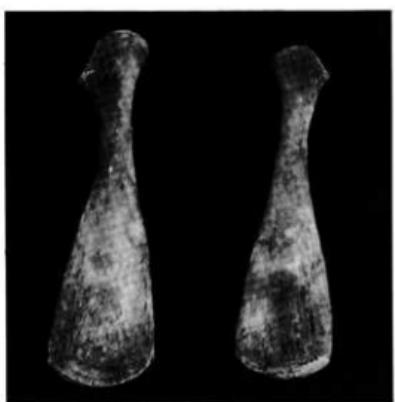
図版XⅡ アオウミガメの頭骨・骨甲・腹甲



1



2



3



4

- 1 : アカウミガメ刺状腹骨板  
2 : アオウミガメ刺状腹骨板  
3 : アカウミガメ肩甲骨  
4 : アオウミガメ肩甲骨

図版XIX ウミガメ標本写真

## あとがき

昭和52年、53年の2年度にわたって調査したCS77地区は、縄文時代前期（大木1～6式）の文化層が約5.5mにわたり堆積していた。土器編年基準となった大木圓貝塚の体大きさをさまざまと見せつけられた次第である。さらに、縄文時代中期（大木7～10式）の文化層が1地点で良好に堆積している場所が発見できれば、編年基準となった大木圓貝塚をこれらの2地点で表わすことができる。しかしこうした地点がそう簡単に発見できるわけではない。

大木圓貝塚では昭和50年度から、東北大学文学部の山口 格教授の指導により貝塚保存実験を行って来た。CS77地区でも仮の保存小屋を覆せ保存展示を試みた（八巻正文他 1979 P. 67）。東京国立文化財研究所の樋口清治氏に見ていただいた結果、発掘区が狭く、丘の中腹に位置し適度に温り気があり壁に亀裂ができるのを防いでおり、陽当たりの良い斜面にあり冬の凍結を防いでいる等、好条件が重なり、非常に良く保存されているとの診断をいただいた。しかし水分の少い断面上部では亀裂が入っている。このような貝塚保存実験から判断して、CS77地区は当分の間埋もして保存するのが賢明と判断する。

文化財の活用という点から考えると、発掘や貝塚の展示は最も重大な事業である。昭和48年度から53年度にかけて行われた発掘調査は、整備のための基礎資料を得ると同時に、多くの人に見学していただいたので、文化財の活用も大いにできた。発掘に当っては、できるだけ多方面の分野の研究者に協力指導していただくようにつとめ、最高水準の調査を行うよう常に心がけて来た。今後はこれまでの6年間に発掘した資料を整理し報告し、研究者をはじめ、一般の人々もこの貴重な資料を活用できるようにせねばならない。

昭和54年3月30日、指導委員である丸川頼一博士を設ヶ関ビルに訪ね、大木圓貝塚の環境整備計画について御指導をいただいた。その主たる内容は以下の通りである。

1. 正門の右手にビジターセンター及び駐車場の建設用地を早急に用意する。
2. 遺跡内を横ぎる2線の電柱を移転する。
3. 植生調査が終ったので、植栽計画図をつくらねばならないが、それには史跡としての、しっかりとした将来の計画図をつくってもらわねばならない。
4. 史跡境界には境界杭だけでなく柵が必要である。周囲の開発が進むにつれ境界侵害も激しくなるだろう。柵はフェンス（金網）をつかったようだが、フェンス（金網）はchicken houseと悪口されるように、あまり景観の良いものではない。そこでフェンスを張る場合には境界線から1～2m内にし、境界とフェンスの間に植栽するのが良い。
5. 史跡の土地買上げ以後をふり返ってみると、史跡地区的買上げと同時に、ビジターセン

ター建設用地として、現在の正門の南の土地を取得しておくべきであった。土地買上げの次は境界にしっかりと柵を作る。その次に環境整備のための基礎調査（発掘及び植生調査等）を行う。この調査をもとにはじめて環境整備を行い、同時に発掘によって得られた資料の整理・研究を行い研究者をはじめ、一般の人々が資料を利用できるようにする。

6. 環境整備は「歴史公園」づくりをした方が良かったのではないかろうか……。

昭和47年度から始まった環境整備事業は調査と整備が並行してなされたため、さまざまな支障があった。例えば苑路ができるとその管理に予算が食われた。年五回は刈払いをしないと道筋に草や竹がはえてつかいものにならなかった。少ない予算を基礎調査と整備で分けた上、整備した地帯の維持管理にも費用がかかったので、調査も整備も思うように進まなかった。「整備が始まって何年にもなるのにいつになったら整備が終るのか」という声が多く耳にした。

ともかく、大木闇貝塚を国指定史跡として、約20万m<sup>2</sup>もの広大な地域を保存しえたことは、研究史上これ以上の功績はなく、ここに土地買上げに尽力された関係者に対し、厚く敬意を表したい。今後は保存においてはもちろん、環境整備においてもまた研究においても、日本一の貝塚になるよう努力せねばならない。

(八巻 正文)

---

七ヶ浜町文化財調査報告書第5集  
大木囲貝塚  
—昭和53年度環境整備調査報告—

昭和55年 3月20日印刷

昭和55年 3月31日発行

発行 七ヶ浜町教育委員会  
宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮字飛谷郷5-1  
印 刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 電話 (63) 1166

---

